

## インターン活動から見た本当の自分

佐藤 眞緒

私は2020年の2月から3月までの約1か月の間、週2回JFCネットワークの事務所でインターンをさせていただきました。私がJFCネットワークでインターンをするきっかけは、東南アジアに興味がありながらフィリピンや日本に住むフィリピンの方々の情報や知識を私が知らな過ぎたためです。何かインターンをしてみたいがどこで何をしたらいいのか迷っていた時、自分の人生を振り返り私の周りにはフィリピンにまつわるものや人が多々あったのを思い出しインターンをする決意を決めました。特に大学に入り、フィリピン人のお母さんと日本人のお父さんのハーフの友人を持つ機会が増えたことや今まで通っていた英語の塾の先生がフィリピン人であったことも、私がJFCネットワークに興味を持ったきっかけでもありました。

インターンの活動が始まった時に一番驚いたのは、頻繁にまた絶え間なく事務所に電話がかかってくる光景や膨大な資料や情報の多さでした。私の主な作業が様々な参考資料の翻訳であったため、分厚くなったファイルが時間を追うごとに増えていく光景からどれだけ多くのクライアントの方々がお父さんに会ってみたいという思いを持ち、また助けを求めているのかを強く感じる事が出来ました。活動を進めていく中で、私は、紙だけの情報ではなく実際に会ってお話を聞いてみたいという思いがありました。残念ながらコロナウイルスの影響で様々なイベントがキャンセルになり参加することはできませんでした。

しかし翻訳の作業の中で様々な方のおかれている状況や今に至るまでの人生を読むことで、いかに自分が日本において日本人としてのマジョリティ（数もようだが持っている特権の多さなど）の特権に気付いていなかったのか、また知らずに今まで過ごしてきたことへの恥ずかしさを覚えました。日本に住んでいながら日本の表の面しか見ずに過ごし、英語ができるから国際的な視点を持っているという幻想に踊らされていたことにも気づけた気がしました。お父さんがいることは当たり前、お母さんもお父さんも日本人なのが当たり前、日本の国籍を持ち、日本の名前を与えられ日本で小学校、中学校、高校、大学の教育を受けられることが当たり前という様々な日本で日本人として過ごしていくうちに気付けない当たり前ではない現実を知ることができました。これらが当たり前でない人々はたくさん存在し、助けを求めていることを私のような日本に日本人として住むことができるマジョリティ側が自覚して協力していく大切さにも気づくことができました。特に政府に訴えかける際にはマジョリティが声を上げなければ、話題にも上がらない問題が日本にもたくさん存在します。私が今回のインターンでの活動でどれほどの人々に影響を与えられたのかは分かりませんが、この活動を終えた後もニュースなどからの情報収集を拡散したりやゼミでの研究テーマなどに繋げることで、長期的ではあるものの私の話から複数の新たな人々の気づきに繋がればこの活動を有意義に使えていると言えるのではないかと感じました。

最後に、JFC ネットワークに相談に来ていた方々の明るい未来を祈っています。